

ラグビー生活を顧みて

II B 伊五澤 富 雄

高等二年の時入部をすゝめられてラグビー部に不安なから入った。そして基本より教えられ練習に勵んだ、毎日。其の後二三週間はかりしたら醫專と練習試合をした。力も技もなく始めての試合だったので何んだか變な氣持がする。始まつたが兎に角恐しかった。ボールが目の前に來ても取る氣になれず、又取れるだけの能力もなく、一時間唯人の後を追つて走のみ、二回はかり蹴つてみただけだった。試合が終つてから考えたが、とても俺にはできそうもないと思つた。入部しなければ良かったと後悔したが始まらない。

その時昨年の先輩が來て、あれで良いんだと云つたが、果して良いのか俺には見當がつかない。多分お世辭だらう。しかし今更止める譯にもゆかず、やつてみようという氣になつて又練習に精出した。日曜以外は毎日五時までやり、それが終つてからグラウンドから學校まで走つて來、急いで着替え、そうして走らなければならぬ。もうベルは鳴つて汽車は立錐の余地もない位に混んでゐる。しようがないのでデッキにしがみつき四十分も、もまれてやうやく汽車より解放され、三十分も歩いて家に着く頃はもう綿の如く疲れ切つてゐる。カバンを投げ出すより早くゴロリと横になり、夕飯となれば起きて食う。勉強しようと思つても、ねむりの悪魔が夢路にしきりに誘う。結局は何もせずになつてしまふのが常だった。それ故、授業時間中、眞面目に聞くより外はなかつた。又その時だけでも熱心に聞いていれば、そう成績は悪くもならないで済む。

ラグビーを始めた年は前より成績が落ちた譯でもなかつたが、ラグビーの方で恵まれません、決勝まで行けたが敗けてばかりいた。

三年になつたら、少しは上手になつたのだらう、シーズンを通じて岩手縣に於ては負けることはなかつた。がどうしたことか、秋に入つてからは何時もの如く決つて雨が降つて來る。田に入つたよりひどかつた。全身泥でうづま

つて味方も敵もわからない。眼にも泥が入つて見えす、耳も泥がつまつてしまふ。寒くならない時だつたから少しは良かったが寒くなつてからは大變だつた。風呂屋に行つても良い面をしないで川か沼でも見つけて洗うより仕方がなかつた。今年買ったばかりのユニホームも今ではすつかり色がさめてしまつた。何しろ十試合もドロにつかつていたのだから。即ち花巻で保善とやつたとき、秋期高体連のとき、又仙台でも、黒澤尻でも。

斯くして優勝旗一本、カップ一つ、楯三つ、それに数枚の賞状を獲得して我々のラグビー生活も終つてしまつた。

三回にもわたつて合宿し、部長角掛先生の御指導を受けながら、ねむいのを無理に起こされ早朝より練習したことや、二人の怪俄人が出て、仙台での東北豫選では苦戦し、遂に大差をつけられて敗けてしまつたことなどが脳裡に深くさざまれている。又苦しいながらも楽しかつた練習、試合などの事は一生忘れ得ぬ思い出となることだらう。

× × ×

ラグビーとは一体どんなものだらうか。一般の人達には余り理解されていないけれども、先づその始りは、英國のラグビースクールと云う所で、蹴球の試合をやつたときに、ウイリヤムと云う學生が無我無中の余りそのボールを持つて走つたことより始まる。それでその學校の名を取りラグビーと名附けられた。其の後色々改良されて發達し、遂に英國の國技にまで發展した。そして英國に於てはラグビーをすることにより得られるもの(後記)を持つていけば、デェントルマンとして認められ、あらゆる場合に於て好遇された。又ラグビーをするものは皆、彼等自身誇りと自覺を有して、毎年行われる全國大會には、國王自らグランドに來て、一人／＼の選手に握手され、ラガーにとつてはこれを無上の光榮とした。これを見て英國のラグビーに對する理解が分るのである。

この様に發展するには、何かそこに良い所があるからなのである。

先づ健康が得られるのは各スポーツの共通點であるが、ラグビーなるものは十五人一チームであつて、その十五人の「協同」は云うまでもなく、各ポジションに與えられた「義務」「責任」それを果す爲には「勇氣」「決斷力」「力」「技」「忍耐」「熱意」を必要とする。そして又プレーするに當つては「公正」でなければならぬし、ルール違反である不正に對して課せられる罰に對しては辯解なしに「従順」でなければならぬ。

この「従順」と云うことも他のスポーツに余り見られない所だが、その最大特徴は「獨立」である。換言すれば援助とか

他に頼るとか、條件の選擇とかは全く計されないのである。ラグビーをちよいと見ている人なら知つていたらうけれども、怪俄人が何人出ようと、絶体チェンジメンバーは許されない。又雨が降らうが、雪が降らうが、風が吹かうが、自然現象などには支配されず、やると決つた以上は決つた通りになる。いわんや試合中に於ては、野球などのドロンゲームやコールドゲーム等の如く中止すると云うやうな事は絶体にならない。

世間では良く云う。ラグビーとは野蠻で下品なスポーツであつて頭の悪い、ガムシヤラな者どもがやるもの、様に解しているけれども、よく考えてみるとラグビーは、小さいながらも一つの社會を形成しているのではなからうか、社會生活上の必要なものは總てこのラグビーに含まれていると考ふる。

即ち、社會生活を營む爲に必要な「協力」物事に對する「義務」自由々々と叫ばれているが、それには「責任」が伴うのである。義務、目的遂行には「勇氣」「決斷力」を必要とする。そこで行動に移される場合、「力」「技」なくては空念佛となる。力や技があつたにしろ、とことんまでやるという「熱意」と「忍耐」なくては到底成功は望めない。又社會生活の上には秩序が保たれねばならない。それが爲に「法律」が必要となつて来る。即ち他人に迷惑をかけてはならない。その範圍に於て我々は自由な行動をとらねばならない。故にそこには「公正」が必要となつて来て、自分の目的達成には手段を擇ばずでは駄目だ。然るにラグビーに於ては、數あるスポーツの中でルールが一番多く、且つ難かしい。それゆゑ「公正」は欠くべからざるものとなつてくる。若し誤つて公正を欠くならば、直にその違反に對して罰が課せられ、理由はどうあらうとも「従順」に受けねばならない。社會に於ても不正あらば、社會に對して迷惑をかけたのは、理由はどうあらうとも確かなのだから、罰はだまつて受けるのが當然であらう。

又社會と云うのが「獨立」できないならば何んら價値のないものとなる。一つの社會を運營する場合に自給、自足、出きないで他の援助のみを待つてゐるならば甚だ永久性に乏しい。

以上くどくと述べて来たが、これでラグビーの本質が大体解つて来たと思はれる。

或いはまだいふ人もあるかも知れない。ラグビーは怪俄が多くて危ぶないと。それは今までの結果からして否定できないが、ルールの通りやつていても怪俄は起り得る。がしかしこれらは皆偶然の出來事である。誰だつて故意にやる者はいない。唯最後に云いたい事は、ラグビーの練習、試合は確かに苦しく、辛い、けれども、樂な環境と、苦しい環境の何れかで

育つた場合 どちらが社會の荒波を乗り切るに早いか、と云うことである。

『濫床に育つた花は弱く、野山の花は強い』これは何かの本で見たやうな氣がする。

× × ×

自分の體驗と今自分が述べ理論とを照し合せてみると、どの様なことになるか。

自分が實際行つて現在獲得したのは第一に健康である。中學三年の頃胸を悪くして醫者の世話を受けていた自分にとつては大收獲であつた。

又ラグビーをしている間は、そのことのみ心身に集中され他の事は總て忘れてしまつて、他の雜念雜事は頭に入つて來ない。それ故生活が前より規則的になつてくることは確かである。

がしかし今自分で前記したラグビーの本質（即ち『獨立』『協同』『責任』等）が果して自分のものになつたかは自信なくして斷言できないが、社會の荒波にさらされた場合に、その本質が獲得されたかどうかはつきりと生活の上に反影して來るものと思う。